

## 希望のない土地：ケニア農村地帯に成立したスラム

松岡，陽子  
名古屋大学大学院文学研究科

<https://doi.org/10.15017/2344479>

---

出版情報：九州人類学会報. 38, pp.23-30, 2011-07-10. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

## 希望のない土地 —ケニア農村地帯に成立したスラム—

松岡 陽子 (名古屋大学大学院文学研究科)

キーワード：ゲサギ、マウマウ戦争、土地私有化計画、シングルマザー、貧困の分化

### I. はじめに

ケニア共和国エンブ社会の農村部には、「ゲサギ」と呼ばれる貧困者や社会逸脱者などが集住する地区がある。ゲサギはエンブ社会に数十ほどあり、極端に人口密度が高く、貧困、失業、犯罪、アルコール依存、売春などの特徴が見られる。そこでの家族形成は極めて不安定であり、また地縁的連帯も希薄である。ゲサギの住人たちは常に周囲の富や幸福に対して嫉妬し、近隣の人々に疑惑や不信を抱いている。通常、伝統的社会秩序を重んじる農村部では、貧しいなかでも相互扶助の精神を尊重するが、ゲサギはこれに準じず、個人主義的傾向が見られ、都市部にあるスラムと同じような特徴をもつ。

本稿ではエンブ社会の特異な土地形成史を指摘したうえで、ゲサギに住む人々の生活にかんする不安が彼ら自身の行動をどのように規定しているのか、ゲサギ社会に見られるサブカルチャーに触れながら論じる。

### II. マウマウ戦争とゲサギの誕生

ケニア中央部に位置するエンブ県にはエンブ人が古くから居住しており、2009年の国勢調査ではエンブ県人口 296,992 人を数える [REPUBLIC OF KENYA 2010]<sup>1)</sup>。エンブはケニア 42 民族のなかでも小さな民族であるが、マウマウ戦争において隣接する最大民族キクユに協力したことから、以降両者は互いに政治的に結びつきやすくなっている。

マウマウ戦争とは 1950 年代、イギリスの植民地支配に反発したキクユがその近隣民族エンブ、メルと協同して反政府運動を展開したものである。植民地政府は反政府運動の母体「マウマウ」のゲリラ戦を封じるため、キクユ、エンブ、メルの各地に要塞化した「ムラ (new villages、以下新村と記す)」を設置し、強制的に村人をそこに収容して、彼らがマウマウに協力しないよう徹底的に管理した。

戦前のエンブ社会はイギリスの植民地支配下にあつたとはいえ、20 世紀初頭の植民地化以前から存在した各クラン<sup>2)</sup>の社会制度が認められており、人々の実質的な生活はその社会秩序のもとで可能となっていた。当時エンブ社会には集村はなく、一夫多妻制度を基盤とした世帯が散在していたが、マウマウ戦争にエンブ全土が巻き込まれたことにより、人々は強制収容された新村で、これまで経験したことのない集団生活を送らなければならなくなった。

村人にとって、新村にとどまることはその外で戦闘に巻き込まれるよりもましな選択とみなされ、そこから逃れようとする者はほとんどいなかった。しかし、新村は植民地政府の厳しい監視下に置かれ、村人には重労働が課せられた。また、食糧・物資が乏しく、生活環境がほとんど整っていない新村の生活は過酷であり、実際、多くの村人たちが病気で亡くなっていった。

一般的に新村に収容されたのは女性が多い。戦闘能力の高い若い男性のほとんどは、マウマウ戦闘員になっているか、

植民地政府に捕らわれているかのどちらかであり、新村に残ることができた男性は老人か子ども、もしくは植民地政府に雇われ忠誠を強く誓った者だけである。そのため、新村では女性が一家の主となって家族を支えることになり、父系社会であったエンブにおいて一時的に女性が家族の中心となる特殊なムラが創出されることになった。

1960年にマウマウ戦争が終わると、植民地政府は戦争の原因となった土地問題を解決すべく、土地私有化計画を実行に移した。クランの共有財産だった土地は個人の私有地として分割、分配され、また新村が設置されていた場合は官有地となり、マーケット敷地に指定された。土地私有化計画により、男性世帯主はそれぞれの家族構成などに応じて3~10エーカーを取得したが、世帯主を誰とするかその基準が一定ではなかったため、土地分配に不満をもつ者は多かった。これを受けて、1963年にイギリスから独立したばかりの新政府のもとで、エンブ県は彼らの不満を解消すべくその対策にのりだした。この時、県はマーケット敷地に指定されていた新村跡地の一部(400メートル四方の土地)を私有地化し、それを彼らに分配することを決定した。これにより一部の人々の不満を解消することができたが、しかしこの新村跡地の分割こそ、後にその地区の住人を一般社会から疎外するものとなったのである。

マウマウ戦争時代の新村では一カ所に多くの村人たちが強制移住させられていたため、居住区は密集しており、各家屋は100×50平方フィート(約0.1エーカー)ごとに設置されていた。戦後のエンブ県の土地未取得者への対策はこのマウマウ戦争時代の緊急措置がそのまま応用され、私有地に指定された新村跡地も同面積ごとに分割され、申請者に分配された。100×50平方フィートの土地は一般的な世帯主が取得できる土地面積が最低3エーカーであったことと比較すると、その

約26分の1に相当し、極端に小さい。このようなエンブ県の措置により、この地区は次第に特殊な社会を形成し、スラム的要素を呈するようになったのである。マウマウ戦争時代、新村は戦争に夫をとられたがゆえに女性世帯で占められていたが、戦後の新村跡地は社会によって追放されたシングルマザーたちが行き着く場となり、この地区はマウマウ戦争から現在に至るまで、女性世帯の多いびつな社会状況をつくりあげてきた。

村人たちはマウマウ戦争時代につくられたこのような新村を、エンブ語で「スラム」「発展途上地域」「田舎」を意味する「ゲサギ(gicagi)」と呼び、今も新村跡地は同様の名称で呼ばれている。ここでは、名称の混乱を避けるため、便宜上ゲサギを戦後、私有地化された新村跡地に限定して使用するものとする。

### III. ゲサギの生活

#### 1 ゲサギの現状

農業を中心とした自給自足型の生活を主とするエンブ農村社会において、ゲサギでの生活は生計の維持において極めて不利である。100×50平方フィートの土地は農耕など望めず、人々が居住するためだけのものでしかない。ゲサギの人々は自分の土地で農作物を得ることができない代わりに、ゲサギ周辺の他人の土地で農作業に従事し、賃金を得る。そのため、ゲサギの人々はかなり早くから貨幣に依存する生活を送っていた。同じクランでまとまって集住することができなかったこともあり、ゲサギではその成立当初から住人同士の連帯感や親密さは希薄であった。

この傾向は近年ますます顕著であり、これは今もなお増え続けている長屋の存在とも関連している。ゲサギの土地は地価が安く、また同じクランに属する人々の土地売却にかんする反対がまったくないため、土地は簡単に売買される。不動

産投機としてゲサギの土地を購入した富裕者が長屋を建設しているが、それが現在も多くのおそ者をひきつけているのである。筆者が2005年にケゼモ亜郡<sup>3)</sup>のゲサギで行った全戸調査では、ゲサギ全人口960人中、711人という約74%が長屋(一部一軒屋)などで部屋を賃借していた<sup>4)</sup>。この数値にみるとおり、ゲサギ社会は入れ替わりの激しい長屋の住人がつくりあげている部分が多く、彼らは長期間居住するつもりがないため、地域づくりへの貢献は低く、個人主義的傾向を増大させていった。

また、ゲサギを特徴づけているのがシングルマザーの存在である。ここには家族から追放されたり、勘当されたりしたおびただしい数のシングルマザーがおり、彼女たちのほとんどが長屋暮らしをしている。2005年には、ゲサギ全世帯のうち約4割が女性世帯であり、子もち女性の人口調査では全220人のうち正式であれ、内縁であれ、パートナーがいる女性は102人しかいなかった。つまり、ゲサギには母親である女性の2人に1人以上がパートナーをもっておらず、このデータからもシングルマザーの多さを指摘できる。ゲサギがナイロビのような大都市でも、際立った商業要地でもない一般的な農村社会にあることを考えると、その数値は特異であると言えよう。彼女たちは長屋の一室を安い家賃で借り、ケバロア(*kivarua*、日雇いの仕事)をして生計を保つ。農村部のケバロアは農作業がほとんどであり、賃金は1日100ケニア・シリング<sup>5)</sup>が相場である。しかし、ゲサギの若い女性たちの多くは重労働の農作業を嫌って、売春で1回50~100ケニア・シリングを稼ぐことを選択しがちである。ゲサギでは男女が正式に結婚することはほとんどない。高齢者を除いて、ほとんどが内縁や一時的な関係性である。エンブ社会では男女が離別したあとの子どもは母親がひきとるのが一般的であるが、ゲサギでは売春が盛んなこともあり、父

親の異なる複数の子どもをもつ女性は非常に多い。

また、このような状況を積極的につくりあげているのがゲサギの男性である。彼らは伝統的に課されてきた男性の家族に対する役割を無視し、家族を十分に扶養することを拒絶する。彼らは時々仕事に出かけるが、女性ほど生計の維持に熱心ではない。男性がたまに稼いだ収入は家計に入れられるのではなく、自分自身の遊興費にあてられることが多い。実際ゲサギでは男性が一日中、酒や賭博などに興じ、遊び歩いているのがよく目撃される。子どもの面倒に責任を負わない男性たちは簡単に異なる女性との出会いと別れを繰り返し、彼らにとってゲサギの生活は女性と比べて不満の多いものではない。

## 2 ワンジャの事例

ここで、ゲサギに住むワンジャ(仮名)を例にゲサギの生活を見てみよう。

ワンジャは21歳(2010年当時)のエンブ女性であり、ケゼモ亜郡のゲサギ付近にある一般の農村社会で育った。セカンダリー・スクール2年生(日本の高校1年生に相当)まで学校に通ったが、母親が亡くなったことで家計の維持に支障が生じ、中途退学を余儀なくされた。父親はアルコール依存症であり、彼女は現在父親から家を追放されている。

ゲサギの多くの人々はエンブの社会規範から逸脱した生活を送っているため、自分の生活や人生について尋ねられることを殊更に嫌うが、ワンジャの現在の生活が安定していることもあるのか、彼女は筆者による聞き取りに穏やかに笑みを浮かべながら話す。

彼女のパートナーはゲサギに駐留する警察官であり、収入に困ることはなかった。現在、彼との間に生まれた1歳の娘をもつ。ワンジャはゲサギのなかでは貧しいシングルマザーたちの嫉妬の対象であったが、パートナーが地元の有力者で

あるため、目立ったいじめを受けることはなかった。しかし、彼女が必ずしも幸せであるわけではなかった。パートナーはキクユ人であり、地元で正式な妻と4人の子どもがいたからである。ワンジャは彼に妻子がいたことは同棲後知った。

ワンジャは1年前の出産が原因で、現在重労働に耐えられる体ではなくなっている。今はパートナーの安定した収入があるため、専業主婦に徹することができるが、彼がここに駐留する期間は限られており、ケゼモ亜郡での駐留期間が終わったら、彼はそこを去っていく。彼が例外でなければ、ゲサギに在る間の一時的な妻でしかないワンジャをその後も扶養し続けていく可能性は低い。ケゼモ亜郡のゲサギに出向してきた警察官たちはほかの住人よりも安定した収入があるため、ゲサギ内に点在するバーの常連であったり、買春を頻繁にしたりするなど、ゲサギ内の娯楽を享受している。内縁の妻をもつことは娯楽の延長である場合が多く、近い将来、ワンジャが今の生活のすべてを失うことは大いに考えられることである。筆者がその時が来たらどうするのかワンジャに尋ねると、驚いた顔で「そんな先のことをなぜ聞くの？この先どうなるかなんてわからないわ。」と答える。

ワンジャには現在のパートナー以外に経済的援助を乞える相手がいらない。また体に支障があるため、体力のいる農作業で賃金労働をすることもできず、ほかに技術をもたないため、それ以外の仕事を得ることも難しい。彼女はただ現在のパートナーが自分と正式に結婚してくれるのを待っているだけで、それ以外の起こりうる将来に備えることにはまったく考えをめぐらせないのである。二人が離別した後、体に障害をもつ彼女が一人で子どもをかかえて生きる道は限られている。現在ワンジャは売春業に携わるシングルマザーから嫉妬の対象となっているが、近い将来彼女たちと同じ境遇になる可能性を否定することはできない。ゲサギの

女性たちはそれぞれ異なる理由でゲサギに移住してくるが、そこで生活していくなかで多くが同じような生活スタイル、人生のパターンをたどって行くのである。

#### IV. 安定する不安

##### 1 都市部と農村部における相互扶助活動

エンブ社会の多くの人々は経済的に厳しい生活を送っており、明日の食糧の獲得すら不安定な人々も決して少なくはない。しかし、そのようななかでもエンブ社会の大半を占める農村部では、相互扶助の精神を尊重し、周囲の人々と助け合いながら自らの生計をなんとかやりくりしている。農村部で互助活動が容易に実行できるのは、1960年代の土地私有化計画の際、クランごとに各世帯の土地が配置され、人々はクランを中心として築き上げてきた価値観を同じ血縁集団である隣近所と共有することができているからである。そこでの親族紐帯は強く、親族内で協力し合い、持てる者が持たざる者に分け与えることで、経済的貧困を協同してなんとか克服しようとする。例えば、学費の提供がその一つである。子どもに教育を受けさせることはその後の子どもの就職、そして最終的には自分たちの収入につながると思われており、教育を重視する人々は昨今では非常に多くなっている。そのため、親族内で経済的余裕がある者が甥や姪、孫などに対して無償で学費を提供する。

また、労働にかんする協力も農村部では特によく見られる。農作業シーズンになると、親族や近隣の者たちが互いに労働力を提供しあい、豊かな収穫に貢献しあう。このような相互扶助は農作業にかんしてはエンブ語で「マレマ (marīma)」もしくは「エレマ (īrīma)」と言われている。同じような協同作業に「エゼンガ (ithīnga)」という言葉があるが、これは伝統的な家屋づくりにかんして使われる。

農村部の人々は互いに助け合うことで生活を安定させようとするが、特に一家の家計をやりくりする女性の経済的な関心は高く、彼女たちは「メリー・ゴー・ラウンド (merry-go-round)」と呼ばれる頼母子講を利用する。メリー・ゴー・ラウンドは戦後、エンブ社会が貨幣経済に巻き込まれていく過程で定着し、主に近隣の女性たちと連携して一定の金額を拠出し合い、輪番制で特定の者にまとまったカネを提供する。メリー・ゴー・ラウンドは会計を預かる者のカネの持ち逃げやメンバーの不払いが生じやすいため、互いに信頼関係がないと成立しない。そのため、都市部よりは農村部で広く実施されている。

一方、都市部は農村部の生活スタイルとは性格を異にし、クランを中心に構築されてきたやり方は通用しない。しかし農村部とは異なるかたちで新たな人と人との連携が創出されている。

イースタン州の州都でもあり、行政機関が集中して存在するエンブ県ミュニシパリティ (都市部) は県内外問わず、各地から多くの人々が移民しており、異なる民族、クラン出身者が居住している。農村部と比較すると貨幣経済がより浸透しており、カネがほとんどの都市住人の経済的生活を支える。よそ者の多い都市部では近隣者同士で連携しにくく個人主義的傾向が強くなるが、それにもかかわらず相互扶助組織の活動が活発である。これは行政が後援していることによって可能となっており、社会サービス局に組織の登録をすると、一定の助成金を得ることができる。近くに親類がいない者たちは、友人や仕事仲間などとともに相互扶助組織をたちあげ、頼母子講、商売、社会的弱者や経済的苦境に陥った家族に対する援助を行う。彼らはこのような組織を利用しながら、新たな絆をつくりあげ、互いに協力しあうことで、不安定な生活を打開しようとする。

## 2 ゲサギのサブカルチャー

このようにエンブ社会では農村部でも都市部でも形は違うが、人々は他者と連携し協同することによって自分たちの生活を安定させようとする。ところが、ゲサギの場合、このような活動はほとんど見られず、これらと様相を異にしている。

ゲサギがよそ者の多い都市的特徴をもつ地区であることはすでに指摘したとおりであるが、ただし異種混淆の程度は都市部ほどではなく、ゲサギ住人の多くが近くに血縁をもつ。援助が必要な場合は、彼らを頼ることもできるが、ゲサギには家から追放された者、家族と仲違いした者、また社会逸脱者が多いため、双方の関係性は決して強固ではない。ゲサギは個々のレベルでその周辺社会と血縁的つながりがありながらも、社会的に孤立しているのである。

ゲサギ住人が個人主義化し、周囲の人々と親密な関係性を築かず不信を抱きやすくなったのは、1960年代に現在のゲサギが成立してからのことである。周辺の農民たちは農作業シーズンになるとゲサギ住人を安い賃金で自分たちの農地で働かせ、替えのきく非人格的な労働者とみなすようになった。それ以前には労働が貨幣に換算されることなどなかったが、独立以降、農村社会に貨幣経済が徐々に浸透していく過程で、農地をもたないがゆえに貨幣に頼らざるをえないゲサギ住人は労働力の提供集団とみなされていくようになり、ゲサギとその周辺社会は徐々に階層化されていったのである。ゲサギの人々は周囲から搾取され、疎外され、彼らが援助が必要な際も相応の対価が求められてきた。ゲサギの周囲では人々が相互扶助という伝統的な価値意識を維持しながら互いに助け合ってきたなかで、ゲサギだけが異なる状況に置かれてきたのである。このような周囲のゲサギ住人に対する態度により、ゲサギでは個人主義的傾向が強くなり、彼らはカネを媒介しない労働には無頓着になったの

である。

およそ半世紀にわたって周辺化されてきたゲサギでは、農村部で見られるような伝統的な価値観に基づいて連携することは難しく、かといって都市部で見られるような新たな絆をつくりあげることもできない。つまり、ゲサギは互いに協同する組織を生み出すような基盤が極めて脆弱な場なのである。それゆえに農村部のなかでは貨幣経済が早くに浸透したわりには蓄財し、安定した生活の維持に役立つメリー・ゴー・ラウンドのような相互扶助組織がほとんど見られない。過去にゲサギ内の多くの女性たちが参加して組織がたち上げたことがあったが、会計を担当した者が集められたカネを持ち逃げしたため、以後、ゲサギでメリー・ゴー・ラウンドが根付くことはなかった。ゲサギの女性たちにはカネを貯蓄することなく、多くは自宅でカネを管理するが、ゲサギ内の治安は悪く、窃盗が頻繁に起きている。また、内縁の夫がそれを盗んで、自分の遊興費にあてることが頻発しており、ゲサギでは貯蓄し、長期的な将来設計をすることが実質的に困難である。ゲサギの人々は隣近所との連携はもちろんのこと、家庭内での協力体制すら十分に機能していないため、そのような状況が彼らをより一層貧しくしている。

このようなゲサギ全体に見られる現象は、オスカー・ルイスが提唱した「貧困の文化」と共通する点が多い[Lewis 1959, 1961, 1966, 1970]。ルイスによると、貧困の文化は高度に発達した資本主義社会において貧困者が自らの周辺の地位に対して示す適応と反発とみなすが、本稿において対象とするエンブ社会は決して資本主義が十分浸透している社会ではない。しかし、既存の社会のなかに、その社会的、経済的下位地区が形成され、その小社会が周囲の大社会に対応しながらカウンターカルチャーを築き上げてきたという点では共通している。ゲサギもまた周辺社会に対応しながらもそれとは相

容れない独自のサブカルチャーを形成してきた。都市部のスラムと似たような形成過程を経たことで、ゲサギには貧困の文化と共通した現象が見られるのである。

ゲサギの人々は刹那的な人生を送り続ける。貧困の文化にみられるように、彼らには長期的な将来設計をたてたりする態度はほとんど見受けられず、生活にさまざまな問題を抱えていながらも、隣近所と団結し協力しあったりすることはない。また隣近所だけではなく、家族内においても協力関係は不安定である。母親と子どもたちの結びつきは比較的強いが、正式な夫婦は成立しにくく、一時的に終わりやすいパートナー間の信頼関係は十分に確立されない。

さらに、彼らは仕事がない、食糧が足りない、そのような不安の絶えない危機的な毎日を送ることを、むしろ当然のように思っている。ゲサギの人々は自分たちの不安定な生活を不安に思っていないわけではない。彼らは生活にかんするあらゆる不満を他人に訴えたり、現状を嘆いたりすることを躊躇しない。しかしそれにもかかわらず、彼らはまるでほかに選択肢がないかのように、積極的にそのような不安定な生活を選びとるのである。そしてその都度感じる不安は彼らにとって一時的なものに終わる。つまり彼らは決して不安に対応しきれていないのではない。「あきらめ」もしくは「先のことを考えても仕方がない」という観念のもと、意図せずして不安を受け入れており、積極的にそのような不安や不安定な生活を維持するのである。

そして、このようなゲサギの人々の行動は家族をとおして世代から世代に受け継がれる。ゲサギではシングルマザーの娘はシングルマザーになりやすく、また息子は一時的な恋人と同棲を繰り返し、自分の子どもが生まれても面倒をみない。この傾向は近年ますます強くなっており、このようにしてゲサギのサブカルチャーは世代を超えて固定し、強化されている

のである。

## V. おわりに

エンブ社会の多くの人々は厳しい生活のなかでも地縁や血縁、それ以外の新たなネットワークを利用しながら連帯し、比較的安定した生活を維持しようと努めている。しかしゲサギだけは互いに連帯するような動きがほとんど見られず、住人たちはあきらめや絶望感を抱くのみで、困窮した状況を打開しようとする努力自体が無意味なことだと信じている。将来に対する不安はあるものの、刹那的であり、持続した不安を感じることはない。これはゲサギに独自のサブカルチャーが根付いているからであり、ゲサギ全体に見られる貧困状況が住人自身によって積極的に維持されているのである。

しかし、現在エンブ社会で問題になっていることは、ゲサギに独自のサブカルチャーが形成されたということではなく、そのサブカルチャーがゲサギのみに抑え込まれたわけではないということである。ゲサギはその成立過程によりマーケットと隣接して設置されている。つまり、人々が交流しあうマーケットで、ゲサギに根付いたサブカルチャーは特に若い世代を中心として、ゲサギの外へ広がっている。ゲサギのサブカルチャーに影響を受けたゲサギ周辺社会に居住する若い男性は、家族の扶養を放棄しがちになり、一方女性たちはそのような男性に対応しながら自らの人生を選択しなおしている。シングルマザーやその世帯は農村部を中心に増加する一方であり、このような家族のあり方が、親族構造や土地相続制度など、エンブの伝統的な諸制度を揺るがし、現在エンブ社会構造は不安定で脆弱になっている。

ゲサギのその周辺社会に対する影響力は徐々に増しており、エンブ社会構造は都市部からではなく農村部から崩壊しつつある。ゲサギにおける諸問題は局地的

な問題として捉えるだけではなく、ゲサギとエンブ社会全体の相関関係も視野に入れていかねばならず、これにかんしては今後も重点的に追究していきたい。

## 附記

本研究は2002年から2010年に至るまでの断続的なエンブ県における現地調査に基づいており、それらは日本学術振興会科学研究費(特別研究員奨励費)、公益信託渋澤民族学振興基金、高梨学術奨励基金、東海ジェンダー研究所奨励基金によって可能となった。このような機会を与えていただいた各助成団体に深くお礼を申し上げたい。

## 註

- <sup>1)</sup>エンブ県は2009年から2010年にかけて西エンブ県、東エンブ県、北エンブ県に分割されたが、2009年に実行された国勢調査は分割される前のエンブ県の行政区分に基づいて行われている。また、2009年の国勢調査ではケニア全人口は38,610,097人であり、エンブ県居住者は全体の1%にも満たない。
- <sup>2)</sup>戦前のエンブ社会ではクランというよりは、より小規模のサブ・クランもしくはリネージ単位で社会生活が送られていたが、ここでは表記を「クラン」と統一する。
- <sup>3)</sup>ケゼモ亜郡は、2009年の国勢調査では人口10,345人、世帯数2,614戸、面積20.6平方キロメートルである[REPUBLIC OF KENYA 2010]。
- <sup>4)</sup>ゲサギ全戸調査において、調査拒否した19世帯はこれに含まない。
- <sup>5)</sup>1ケニア・シリングはおよそ1.2~1.7円に相当する。

## 参照文献

プレスリー、コーラ・アン

1999 『アフリカの女性史—ケニア独立闘争とキクユ社会』富永智津子訳、未来社。

松岡 陽子

- 2001 「オスカー・ルイス再考——『貧困の文化』の政治性」『文学部論叢』第 72 号、熊本大学文学会、35-50 頁。
- 2011 (印刷中)「シングルマザー化する寡婦——ケニア・エンブ社会の婚姻と女性」『比較人文学研究年報』No.8、名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室。
- ANDERSON, David
- 2005 *Histories of the Hanged: Britain's Dirty war in Kenya and the End of the Empire*, London: Weidenfeld & Nicolson.
- ELKINS, Caroline
- 2005 *Imperial Reckoning: The Untold Story of Britain's Gulag in Kenya*, New York: Henry Holt and Company.
- HAUGERUD, Angeliqne
- 1984 *Household Dynamics and Rural Political Economy among Embu Farmers in the Kenya Highland*, Ph.D. diss., Northwestern University.
- 1995 *The Culture of Politics in Modern Kenya*, New York: Cambridge University
- LEWIS, Oscar
- 1959 *Five Families: Mexican Studies in the Culture of Poverty*, New York: Basic Books. (オスカー・ルイス『貧困の文化：メキシコの〈五つの家族〉』高山智博ほか訳、思索社、1985年。)
- 1961 *The Children of Sánchez: Autobiography of a Mexican Family*, New York: Random House. (オスカー・ルイス『サンチェスの子供たち』柴田稔彦ほか訳、みすず書房。)
- 1966 *La Vida: A Puerto Rican Family in the Culture of Poverty, San Juan and New York*, New York: Random House. (オスカー・ルイス『ラ・ビエダ』1~3巻、行方昭夫ほか訳、みすず書房、1970-1971年。)
- 1970 *The Culture of Poverty*. In *Anthropological Essays*, New York, Random House, pp.67-80.
- REPUBLIC OF KENYA
- 2010 *Population and Housing Census 2009 Volume 1*, Nairobi: Government Printer.
- RIGDON, Susan M.
- 1988 *The Culture Façade: Art, Science, and Politics in the Work of Oscar Lewis*, Urbana and Chicago, University of Illinois Press.
- SABERWAL, Satish
- 1970 *The Traditional Political System of the Embu of Central Kenya*, Nairobi: East African Publishing House.
- ケニア政府公文書  
Embu District Annual Report, 1930-1970, 1972-1977, 1979, 1981, 1982, 1984, 1985.  
(2011年6月7日 掲載決定)